

正誤表

本誌2頁上段5く6行目にて、誤りがございましたので、左記の通り訂正いたします。
関係する皆様に深くお詫び申し上げます

(誤)

逆位相——同一の聴覚像でありながら、それがシジする概念が場合により異なる現象——の実態を、

(正)

逆位相——同一の聴覚像でありながら、それが指示する概念が場合により異なる現象——の実態を、

《コウシヨウ》文学の逆位相

——音声言語の位置——

天野 早紀

はじめに

同一の概念について使い手の性別や世代、職業や専門分野、またことばの伝達様式の相違等によって異なった聴覚象（音声表現）が用いられる、位相という現象がある。例えば同じ一人称であっても「あたし」「おれ」、また同じ断定の表現でも「です」「だ・である」というように、場合に応じた複数の聴覚象の候補がある。

一方で、その逆の現象も見られる。同一の聴覚象でありながら、それが指示する概念が場合によって異なっているというものである。単なる同音異義語であつたなら、これは大した問題ではない。しかしそれが一見同じ領域を扱う異なる二つの学問分野において、且つ一見よく似た概念を指しながら、その概念に伴う周辺要素の側に、僅かな、しかし確実な相違が潜む術語であつた場合には、その影響は如何に甚大なものとなるうか。それらの術語が生じた当代研究者であれば、そこに存在する相違を認識しないことはなかったで

あろう。しかし議論の渦中に居なかつた第三者がその術語に対峙する時には、両学問分野の領域が接近していればいるほど、且つその相違が一見僅かであればあるほど、見逃され、また最悪の場合には存在をすら忘れられてしまうこともあるであらう。況や時代を隔てた現代の我々をや。

文学研究と民俗学とが出会つたとき、文学研究者である高木市之助は、その混乱を予感し警鐘を鳴らし続けていた。曰く「同じ一つの文学的現象であつても、これをたとえ、民族心理学の立場からすると、言語学の立場からすると、そうして文学研究の立場からするとでは、その対象的性質において必ずしも同一ではありえない」と。しかし後に、氏の予感が残念ながら的中することとなる。

それは文学的現象ですらない。《コウシヨウ》文学という術語、そのことばの上において生じた。《コウシヨウ》文学は、文学領域を同じく扱う文学研究と民俗学とにおいて、文学の素材である音声言語要素を指すものとして用いられていたが、その術語の用法、つまり位置や役割が、厳密には異なつていたのである。現在我々はこれを確かに認識しきれているであらうか。ことばを操る——と思つ

ている——我々人間が、《コウショウ》文学ということばのほんの断片に囚われ操られ、その相違を忘却してしまつてはいないであらうか。

本稿は《コウショウ》文学の研究史を追うことでその用法面での逆位相——同一の聴覚像でありながら、それがシジする場合により異なる現象——の実態を、それが生じていく過程とともに明らかにし、術語使用に際して改めて留意を促すことを目的とする。

一 明治時代の研究史の概観

——国文学史編纂からの出発——

まず《コウショウ》文学を仮に定義しておくとするれば、それは口から発声され耳によつて聴取される、真に音声言語のみによつて構成される文学形態である。漢字で表記することや、また他から借りてきたことばでこれを説明することも可能であるが、ただでさえ混乱の生じやすいと分かっているところを、より一層かき乱す危険を冒すことはできない。後に触れるが、事実、漢字表記の相違は《コウショウ》概念の周辺要素の相違に繋がってくるものなのである。したがつて現時点ではあくまで単純に、言語の一面である音声言語

のみによつて構成される文学、として理解しておくほうが、単純ゆゑに安全でもあらう。

それは明治時代の歴史的事業の中に発見されていく。明治当代文明開化の風潮の中、先進西洋諸国に倣わんとした日本国は、文明史としての国文学史書の編纂を試みたのである。したがつてそこでは何より文明社会、そこに生きる文明人の文明的思想感情という内容の価値が重視され、そこを出発点としていた。

本稿で確認していくのはその中でも上代文学、特に古代の「未開時代」文学である。文学といえは文明の産物であるというような印象が伴うであろうし、文学史編纂も正にそれを意図していたのであるが、「未開時代」も決して侮ることはされなかった。明治の文学史書編纂の嚆矢と目される三上参次・高津敏三郎『日本文学史』の言を確認してみよう。

さて、人智未だ開けざる社会の文学は、感情より湧き、想像より生まれたる者多し。詩歌の如き即ち是なり「……此詩歌こそ、不文の文学ともいふべくして、真正文学の萌芽の地に埋伏せるものといふべけれ。

（一八九〇年 三上参次・高津敏三郎『日本文学史』）

ここに表される通り、古代の「未開時代」文学、それは後世文明時代の本格的な文学の原初的存在として、いわば「文学の萌芽」として、文学史に同じく必要とされ、事実含められていたのである。

また明治もさらに下ると、時代はナシヨナリズムの風を帯びるようになり、それは文学史編纂にも影響を及ぼした。すなわち「未開時代」文学の価値を「文学の萌芽」からさらに発展、本格的文学の存在価値の伝統を確固としたものとして保証してくれる」国文学の根拠」として更新し、より重要な存在に位置づけるのであった。

我国文学の最初の生立はどういふ有様であつたか。純粹の日本文学はどういふ方向を以て始まつたかといふことは、此時代の文学で分かります。三つ子の魂百までといつて、人の性質が子供の時現はれるやうに、我国文学の性質は此上代の文学の中に能く現れて居るやうに思はれます。

(一八九九年 芳賀矢一『国文学史十講』⁽³⁾)

上代の歌謡は祝詞とともに一は個人的抒情詩として一は民族的祭神の詞むしろ叙事詩として最古国民の詩的産物たり。支那文化の影響の未だ及ばざりし太古国民の文学として興味の最も深きを覚ゆ(圈点略)。

(一九〇八年 芳賀矢一『国文学歴史代選』⁽⁴⁾)

概観するに、この時代にありては文学なほいまだ後世におけるが如く外国文芸の影響を受けず、よし受けたたりとするも、極めて僅少にして、わが日本国民が本来の国民性を最も赤裸々に表白し、従つて日本国民の純粹なる感情をありのまゝに窺ひ得る点において、他時代に見難き特色を有するものといふべし。

(一九〇八年 藤岡作太郎『国文学史講話』⁽⁵⁾)

文学史編纂はこのように、まず文明社会性の反映たる内容面の価値を最重要視し、文明時代の本格的文学、またさらにその存在価値の伝統を保証してくれるものとして、古代の「未開時代」文学をその叙述対象に含めたのである。

次にその結果として導かれるのが、それらを構成する言語素材面の議論である。「音声言語のみによつて構成される文学」が、ここにおいていよいよ発見されていくのである。前掲の三上・高津書、芳賀書、また藤岡書から、その言及をそれぞれ引いて具体的に見ていこう。

文字なくして、言語のみの時代には、音に感情を表はすのみ

ならず、口碑を以て事蹟を後世に伝ふるには、自ら誦記に便なる歌謡の体を用ひたりし事常なり「…」

すべて、この時代の歌は、天真爛漫の一語を以て、評し尽くすべし。前にも云ひし如く、上古の人は、折にふれ、喜怒哀楽の情を動かし、時、平語に曲節を付して、謳ひ出したるもの、即ち是れ歌なれば、其詞勢率直にして、至誠の情、其樸野遵強なる詞のうちにあらはる。(三上・高津書)

上代の歌と相並んで我文学の最も古いものは祝詞であります。之は神祇を祭る詞であります。この二つが我国民の上古文学であります「…」いづれも文字がない時代ですから、口々に伝唱せられたものであります。(芳賀書(十講))

祝詞は普通散文として取扱はるといへども、その用神意を悦ばすにあり、一種の階音を有せしめて、壇前に朗読せるものなれば、一に節調を主とす「…」されば祝詞の長所は声調の整へるにあり、声調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、太古文学を通じたる性質なりといへども、

祝詞において殊に然りとす。

(藤岡書)

「未開時代」文学当代、日本は未だ文字言語を持たず、そこに存在したのは真に音声言語のみであつた。言語体系を持つあらゆる集団において、音声言語を持たないものは無い。音声言語は一瞬一瞬独自の響きを持ち、その時その場にいる全ての人間と知覚を共有、発声と聴取とを繰り返し、彼らの人間的隔たりを曖昧にしていくな。空気の振動というその消えやすく儂い存在は、人々をしてそれを希求、一種神秘的な空間を形成せしめたに違いない。

文学史編纂は現在に残る文字資料を手掛かりに、そこに写し取られた音声言語のありし日の姿、真に音声言語のみの姿を、遡り想定しようと試みた。それが「口々に伝唱せられた」歌謡や祝詞であり、「声調の美」を伴うものであつたのである。但し同じく引用部に「率直」「樸野遵強」「思想の比較的に見るべきものなき」等の形容が見られる通り、その素材面への言及はあくまで内容面の未開性と伴わされる観念的なものに留まり、先に述べたような独特の物理的性質といった具体的な面にまで及ぶものは少なかった。

また文字から遡り想定するという手法にも、その資料上早くから限界が指摘されていた。古代「未開時代」文学はその歴史のあまりにも永く遠いことから、現代にまで残る資料がそもそも少ないと

いう量的限界を抱えている。加えてその永い伝承過程には、一つの文学についても様々な内容的発展・変遷があつたはずである。それを後世になってから文字に写し取つたとなれば、時代を大きく隔てた筆録者の思想の反映により何らかの潤色が施されている可能性もあり、質的にも不安が残るのである。

それでもしかし、「音声言語のみによつて構成される文学」が見られていたことには相違ない。明治時代国文学史編纂の文脈において、それは文明時代の本格的文学の価値を保証するものとして、必要不可欠な存在であつたのである。それを扱うための手法に内容面資料限界(量・質ともに)を抱えながらも、やはり見出されねばならない存在であつたのである。

二 昭和時代の研究史の概観(第一期……一九三〇)

——文学研究と民俗学との出会い——

「音声言語のみによつて構成される文学」の研究史は明治時代国文学史編纂から出発したが、それは大正時代に一時衰微、昭和時代に至つて再度本格化することとなる。しかしここに至つて、文学研究にとってある一大転機が訪れる。それは文字資料を手掛かりに、

そこから遡り想定するという研究手法の限界の再認識であつた。すなわち伝承過程及び筆録時の内容面限界のみならず、新たに素材面にも限界が見出されたのである。

そのきっかけとなつたのは時恰も昭和時代、学問的体系化を以て新たに台頭してきた分野、民俗学との出会いであつた。民俗学は、文明国家においてその国民性の基層を見出すために民族文化を求めるとして、その研究姿勢上は国文学史編纂とほぼ同一の立場であつたが、しかしそれを可能にするための手法については全く対照的であつた。すなわち「音声言語のみによつて構成される文学」について、文学研究はそれを過去、古代「未開時代」に見出し、またそれを文字資料から遡るとしたのに対し、驚くべきことには民俗学はそれを現在に見出し、それゆえ音声言語そのものを直に扱つてみせるとしたのである。

現在にあつて直に扱える音声言語とは、今日に現存している民間伝承であつた。これは文学研究が見出してきたのが雅の文学であつたのに対し、未だ彼らに認知されない、いわば遺された俗文化ともいふべきもので、国民性の基層としての民族により近いものであるとして再発見、その内容面から新たに重視されるようになったものであつた。

「遺された」ものを対象とする以上、それを発見すべきは研究者の生きる現在、その言語素材はいわずもがな、未だ文字に記録さ

れず認知されない、現在に響く音声言語そのものであった。民俗学はこれを対象として採集・分析し、そこから加えて過去の音声言語のみの在り方までも、文字からするのは比較にならないほどの精度で再構成することが可能であると考えたのである。

普通謂ふ所の、文学史家や国文学者などのやつて居る研究は、決して有機的なものであるとは言へません「…」ところが偶然にも、他の方面から此地方文学を研究していく方法が、次第に開かれて参りました。すなはち、日本の民間伝承を研究して居る人々の為事が、自から文学史と接触致しますので、民間伝承の研究ではありますが、或点迄は、文学史の研究ともなるのであります。

民俗学は、今日残つて居るものを研究して、過去を識ると共に、今ある事象の原因が、何処から来て居るか、といふ事を知る事になるのであります「…」殊に有力に我々の生活を支配してゐますのは、言語伝承でありまして、これが次第に発達して、文学・諺、或は音楽の土台ともなつて来るのであります。

(一九三〇年 折口信夫「東北文学と民俗学との交渉」⁽⁸⁾)

右は折口信夫の言であるが、この通り、文学研究に對峙する形で民俗学自らの手法を有機的なものとして主張している。そしてそれはやはり国民性の基層を見出すという姿勢の上では、文学史編纂と同一の役目をも果たし得るのである。

また併せて注目すべきは、民俗学がこの時点で既に、その直に扱える「音声言語のみによつて構成される文学」を、素材面から対象用語化して具体的に呼称することを試みていたことである。但し先の折口書はそれを「口頭文学」とし、また別に金田一京助は「口碑文学」とする等⁽⁹⁾、その呼称は民俗学内部でも未だ統一されてはいなかったようである。

気付かされてみれば何ということはないが、文字に残された過去に囚われていた当時の文学研究にとつては、その研究手法の発想転換は衝撃的なことであったに違いない。これまでも内容面限界を抱えてきていたそれは、ここにおいては素材面をも加えて、限界を二重に認めることとなる。

文学研究が「音声言語のみによつて構成される文学」について、それを過去に見出す限りは、文字資料から遡るという手法を取る他なかった。しかしここに至つて直に扱える音声言語を現前させられてしまつては、文字資料などは単なる写し物に過ぎず、そこにある

のはただ音声言語の影響なるものに過ぎないのであると、自覚させられざるを得なかったのである。

しかし文学研究はその上でなお、最終的には自身の元々の研究手法を主として選択することとした。なぜか。そもそも文学研究は、自身の対象を文字による文学作品にしか見出さなかったからである。⁽¹⁰⁾それを前提とした上でなお「音声言語のみによつて構成される文学」を発見するとすれば、限界こそあれ、必然文字の写した過去の前身として、そこから遡ることのできる範囲に限らざるを得なかったのである。

吾人の扱ふ古代文学は、主としては文字に記された文学であるといふことに帰著する。いはゆる有史以前の文学に就いて語るのは、残された文学及び文献の中からこれは多分昔からあつたのであらうと推量するを得る意味に於いてにすぎない。

(一九三〇年 武田祐吉『上代日本文学史』⁽¹¹⁾)

但し文学研究が民俗学の発見を無下にしたというわけでは、決してなかった。現在にあって直に扱える「音声言語のみによつて構成される文学」も、或は自身の研究の一手段になるとして受け入れ

ていたのである。但し条件次第ではあつたが。

しかしそれらのものは、証明を経なければならぬ。直感はその時に命中するけれども、日本文学の最古の時代を語るに当たつては、これらの今日の音声によつてゐる文学は、直に取つて資料とするわけにはゆかないものである。(武田書)

ここで問題となつてゐる直に扱える「音声言語のみによつて構成される文学」は、その現存が認められたとして、文学研究にとつてはそれが、既に見出してきた自身の現実の対象である文字に記録されている文学作品、その過去の前身と等号で結びつけられる場合には——例えば古代歌謡の一例として来目歌、正にその遺物である——証明されるのであれば——文学研究にとつても有意義なものとなるのである。現実的ではなかつたようであるが。

そこで昭和時代における両者の研究手法を今一度整理し、さらに比較対照してみよう。**【表一】**を参照されたい。民俗学は現在にあつて直に扱える「音声言語のみによつて構成される文学」、民間伝承を手段として、また以てそれ自身のまだ見ぬ過去を識るとする。研究手段兼、研究対象なのである。対して文学研究はどうか。文学研究は国民の基層を知るとはいえ、あくまで現実の対象は文字に記

録されている文学作品であり、「音声言語のみによって構成される文学」はそれが持つ過去の姿である。したがって限界は承知の上でなお、文字資料から遡り、いわば理想の対象としてそれを想定しようとするのであった。直に扱える「音声言語のみによって構成される文学」については、一手段となる可能性も或はあるものの、先の

武田書引用箇所にも確認した通り、証明を経なければならない点で、少なくとも文学研究にとっては現実的なものではなかった。

【表一】「音声言語のみによって構成される文学」の位置(昭和時代第一期…一九三〇)

		過去	現在
文学	古代「未開時代」文学 (理想の対象) 「音声言語のみによって構成される文学」 ※現存しない・直に扱えない	?	民間伝承 (手段兼対象) 口頭文学／口碑文学 「音声言語のみによって構成される文学」 ※直に扱える (文学手段②)
			元・古代「未開時代」文学 (現実の対象) 「文字資料」 (文学手段①)

三 昭和時代の研究史の概観(第二期…一九三二—一九三四)

——術語成立による文学研究と民俗学と逆位相の顕在化——

前節までで確認した通り「音声言語のみによつて構成される文学」の研究は、明治時代国文学史編纂という文学研究の手から出発、昭和時代に至つて民俗学と出会つたことでそれまでの資料上限界を内容面のみならず素材面からも認めることとなつた。

研究の便宜上やはり、文字資料を手掛かりに遡り想定するという手法を主として取るのが現実ではあつたが、しかし他学問分野である民俗学の成果を受け入れ自身の手法を再考した点、その研究史の大きな進歩であつたとして、これを文学研究の反省的態度として評価してよいであらう。事実、ここに至つて文学研究の側も術語化を試みるのであるが、それはその態度の更新を踏まえながらのものであつたことが分かるのである。

具体的な記述を次に引こう。なお術語該当箇所には私に傍線を付した。

かくして古事記、日本書紀の古史神話は記録せられ、幾篇の祝詞は記し留められたのである。これらの口誦文学の記録は、その文字を与へられた時の口誦の姿であると見る事

が出来る。

古史神話が、初から現在の形のまゝで口誦せられて居つたと為すならば、誤である。「記録せしめた口誦文学」には、その本主的なるものと挿入的なるものとを区別せねばならぬのである。

(一九三三年 武田祐吉「大和時代文学概説」⁽¹²⁾)

自身の理想の対象である、文学作品の前身、ここでは記紀神話の過去実際に語られていた「音声言語のみによつて構成される文学」であつた姿を想定し、これを名付けて《口誦》文学としている。そしてそれは現存しないこと、それは文字資料という写し物から想定でき、ただ音声言語の影なるものに過ぎないのであるという資料上の限界を認め、それをことばの上にも反映し、現実の対象としては、「記録せしめた」《口誦》文学と、注記的に呼んでいることが分かるのである。

なお《口誦》文学が、文学研究にとつては現存しないものであること、それゆゑ対象そのものではなく、理想の対象としての術語であることには、よほど注意が必要である。これは同じく文学研究者である久松潜一の言及にも明らかである。久松はその同年代の著

書最終編において「いつかはまとめて見たいと思ふ研究法の一断面」として、「附録 古典文学の研究に就いて」——当代の民俗学との出会いが、氏をしてそう思わしめたのではないか——を著している。

文学を口誦文学と記載文学とに分け得るならば、口誦文学はたとへそれが後に記載されて居るにしても、作られた当初は口誦されたのであり、また口誦される事によつてその全体性が理解されるのである。従つて口誦文学をそれがありしまゝのものをそのまゝの形に於て再現させるのは不可能である。従つて口誦文学をそれがそのまゝの姿で味ふことは不可能である「……我々の直観作用を加へる余地は殆どないと言わなければならぬ。

(一九三四年 久松潜一『上代民族文学とその学史』⁽¹³⁾)

右は冒頭部の引用であるが、その第一言が「文学を口誦文学と記載文学とに分け得るならば」と反実仮想で開始されている。すなわち「分け得」ない。文学研究にとって《口誦》文学は現実の対象には当たらず、したがってそれ単独では、現実の対象分類の術語として用いることができないものである。⁽¹⁴⁾それは現存しないもので

あり、「我々の直観作用を加へる余地は殆どない」のであるから。それは理想の対象、もつといえば架空の存在であつたのである。《口誦》文学とは、与えられたこの瞬間に消えてしまふ、あるかなきかの術語であつたといえる。

一方同じ頃、文学研究が反省的態度を取ることのきつかけとなつた民俗学の側も、その直に扱える「音声言語のみによつて構成される文学」について独自に用語を統一、改めて術語化を果たしていた。民俗学の大家である柳田国男は、一九三二年に「口承文藝大意」⁽¹⁵⁾を著した。これまでは折口の「口頭文学」や、また金田一の「口碑文学」等、様々の表現があつたのであるが、柳田はフランスの民俗誌家ポール・セビヨの唱えた *la littérature orale* を借り、訳語としての《口承》文芸を、その術語として初めて用いたのである。

始めて口承文芸といふ名を用ゐた人は、仏蘭西のポール・セビオといふ民俗誌家であつた「……」文芸は本来書いたもの、主として人の眼に慇へる為に、文字を備うて表現するものゝ名では無いか。それをば口で語り耳で聴いて、空に伝はることを栓とするものゝ、名称とするのはをかしいといふ風に考へる人の有ることを承知の上で、わざと稍と意外なる俳諧的興味を、喚起さうとしたのが此語であつた。

この術語の原産国であるフランスでの成立については、柳田も論中で解説する通り、一種皮肉な経緯を持つ。但し日本における文学研究は、理想の対象とはいえ古代「未開時代」文学として「音声言語のみによって構成される文学」をも想定していたから、その皮肉の対象には当たらない。柳田がこの術語を採用したのは、ただ音声言語をも文学に含めるためではなく、それを達成している当代日本においてもお、未だ認知されない俗文化としての「音声言語のみによって構成される文学」、民間伝承が遺されているのであるということ⁽¹⁶⁾を、文学研究の側に自覚させるためであつた。

なお皮肉の利かせ方としてはこのように厳密には異なるものの、しかし術語 *la littérature orale* と《口承》文芸とが、両者共に直に扱える「音声言語のみによって構成される文学」を指示していることには、やはり相違ない。

さて、ここで《コウショウ》文学すなわち「音声言語のみによって構成される文学」について、二学問分野とそれぞれの術語用法が揃ったところで、改めてその研究史を整理・再構築してみよう。すると、《コウショウ》文学ということばに潜んでいた逆位相が、ここにおいて顕在化したことは明らかである。すなわち《コウショウ》

文学は、その指示する概念としては「音声言語のみによって構成される文学」であることに変わりはないが、しかし両学問分野によってその術語を用いるときに与えられる位置や役割が大きく異なっていたのである。

「ここからは【表二】を併せて参照されたい。《コウショウ》文学は、まず時系列のどこに位置していたか。それは文学研究にとつては過去、古代「未開時代」に、対して民俗学にとつては、いわば研究の現在に在った。文学研究は既に文字に書かれた文学作品を現実の対象としているから、《口誦》文学はその前身として、必然過去に向かつて発見されるものである。対して民俗学は、文学研究のそれのような、既にある前提物などは持っていなかった。新たに発見し採集した現在の《口承》文芸を以て、初めてそれ自身のまだ見ぬ過去を探るのである。

次に、《コウショウ》文学は、それぞれにとつてどのような意味での対象であつたか。文学研究にとつての《口誦》文学は、すなわち理想の対象である。それが既に文字に書かれた文学作品の、古代「未開時代」の前身である以上、もはや現存しない架空の存在であつたのである。対して民俗学にとつての《口承》文芸は、新たに発見し採集した現在のものであつたから、それは直に扱い得る現実の対象である。それらの具体例としては、前者は記紀神話・歌謡や祝詞などが該当し、後者は民間の命名技術や格言、また唱えごとや童

言葉など非常に多岐に亘るものである。

そうして最後に、《コウシヨウ》文学の位置や対象としての役割が上述のようなものであったからこそ、文学研究の《口誦》文学は文字資料を手段に持ち、そこから遡られるという関係性にあつたし、また民俗学の《口承》文芸はそれがそのまま手段となり、同時にまた目的ともなる自己言及的な関係性を有していたのである。

而して、それぞれを一言にしてまとめらば、文学研究の《口誦》文学は文字資料から遡る過去、理想の対象であり、民俗学の《口承》文芸は現存音声言語を手段兼目的とした現在の現実の対象である。このように周辺要素を大きく異にするものが、《コウシヨウ》文学という同一の聴覚象を持つ術語を充てられている現象を、逆位相ではなくして何と呼ぼう。問題は時系列における位置から始まり、それが、対象が実存するか否かという問題にまで発展し、その結果、研究手段との関係性による学問遂行の難易度にも及んでいたのである。

我々は、《コウシヨウ》文学ということばの断片——聴覚象の共通——に安住し、囚われているわけにはゆかない。そのことばの指示する概念の周辺要素を、それを用いる学問分野と学問領域のそれぞれの性質をも踏まえながら、慎重に検討することが求められているのではないか。

【表二】「音声言語のみによって構成される文学」の位置（昭和時代第二期…一九三二～一九三四）

		過去	現在
文学	古代「未開時代」文学（理想の対象）《口誦》 文学「音声言語のみによって構成される文学」 ※現存しない・直に扱えない	?	民間伝承（手段兼対象）《口承》文芸 「音声言語のみによって構成される文学」 ※直に扱える（文学手段②）
	元・古代「未開時代」文学（現実の対象） 「文字資料」（文学手段①）		

おわりに ——— 研究史の展望及び今後の課題 ———

これまで本稿では、同一の聴覚象でありながらそれが指示する概念の異なる逆位相とも呼ぶべき現象を、概念は一見同一でありながらしかしその周辺要素の側が大きな相違を導いていた点、より見逃されやすく、また忘れられもしやすいであろう《コウショウ》文学

という術語に見てきた。

それは文学研究と民俗学という研究姿勢を共にする二つの学問分野によって発見されたものであった。《コウショウ》文学すなわち「音声言語のみによって構成される文学」は、時系列のどこに位置するか、それがどのような意味での対象であったか、実存するのか否か、またその実態を明らかにする手段との関わりはどのような仕方であったかと、実に広範且つ大きな相違が潜む術語であったのである。

さて本稿で扱ってきた研究史の範囲はおよそ明治時代一八九〇年～昭和時代一九三四年であったが、『コウショウ』文学の逆位相問題は以後もなお存続、否、むしろ状況は悪化し、実際に混乱が生じていくようである。さしあたって概観しておけば、これまでは文学研究と民俗学とでそれぞれ仮にも独立していた『コウショウ』文学という術語の位置が、文学作品の対象分類用語として均され、普遍化されていく動きが見られる。これが実現するとすれば、それは文学一般の素材面からの分類となり、その対として記載文学という概念を伴うことで、音声言語か文字言語かという二項対立的理解を導くこととなるであろう。

この動きには様々の点から問題を指摘することができ、まず何より『コウショウ』文学という術語は、普遍的な、等しい対象ではあり得ない。文学研究の側においてそれが実在しない架空の存在であったこと、それゆえ単独では現実の対象分類としては用いることができないことは、第三節でも確認した通りである。

恐らく研究史は、全くの同一の術語であると信じてそれを用いながら、指しているものが絶妙に異なる場合があるという得体の知れない違和感に襲われることであろう。もちろん当代にあつてその違和感を客観的に指摘する研究者もあつたであろうし、解決策が講じられていくはずである。『コウショウ』文学の研究史は、これ以後もなお長い。本稿で明らかにした逆位相の存在を鍵として、今

後もその研究史の複雑な有り様を注意深く検討していくこととした。

また今回の範囲内にもいくつか課題が残った。それは用字の問題、まず『コウショウ』における口誦／口承の相違である。これは研究史としては後の一九三四～一九三五年、『コウショウ』文学の意味が当代にあつて再考される時期が訪れるのであるが、その議論の過程において実際に取り上げられることが現時点で分かっている¹⁷。本稿当初から片仮名で表記していたのは、このためであつた。また文学／文芸にも、文学研究と民俗学との二学問分野に起因する相違があるのでないかと考えている。この点はより大きく捉えて日本の「文学」概念の成立問題との関わりにおいても検討していきたい。最後に、学問分野越境の問題についても、継続的に問い直していく必要があると感じる。同じ現象を論しても学問分野によってその仕方が異なり、必然返ってくる結果も異なる。それ自体には何ら問題はないであろう、枠組が変われば部分の意味も変わってくるものである。しかしそれに自覚的でいられず、自らの出発した枠組と他から借りてきた枠組とを混同してしまうことも多いのが現実であろう。研究史の未来図でもある。これは冒頭高木書にもその忠告を見た通りで、さらにいえば高木は後年一九三三年の改造社『日本文学講座 第一巻』においても同様の主旨を繰り返しており、その危機感の程が知られるようである。

《コウシヨウ》文学だけでもここまでの大きな相違を呈していたのであるから、学問分野越境の困難と危険性はあらゆる場面においてつきまとうのであろう。高木はそれへの対処法として学問分野の研究限界を定めることを論じていたが、確かにその必要もあるかもしれない。しかし重要なことは、研究結果に辿り着くまでの道筋を常に俯瞰し見つめ直し、そして忘れないことではないか。まず自分は何者であるのか、どの学問分野の枠組を通していいのか、その上で次に対象として何を見ているのか、それは何時、何処に位置するものなのか、またその実態を明らかにするために用いる手段は何であるか。

この姿勢は、従来の研究史を分析する上でも、そしてまた研究の現在にあっても、有意義な解釈の更新・新設を行なっていくために、その可能性を絶たずに挑み続けていくために重要なことであろうと、切に感じるのである。

※書名・引用本文の変体仮名及び旧字は現行のものに改めた。

〔注〕

(一) 高木市之助「日本詩歌の母体への一考察」『国語と国文学』五卷一〇号(一九二八・一〇)、『高木市之助全集 第一卷 吉野の

鮎・国見攷』講談社、一九七六年、所収。

(2) 三上参次・高津敏三郎『日本文学史』金港堂、一八九〇年、『明治大正文学史集成 一』日本文学史』日本図書センター、一九八二年、所収。

(3) 芳賀矢一著 島津久基校注『校注 国文学史十講』富山房、一九四五年。

(4) 芳賀矢一『国文学歴代選』文會堂書店、一九〇八年

(5) 藤岡作太郎『藤岡作太郎著作集 第一冊 国文学史講話』岩波書店、一九四六年。

なお上代文学に日本国民の国民性の根拠を求めることには相違ないが、藤岡は上代の中でも特に古代については「思想の純潔は即ちあれども、単純幼稚の域を脱せず」としてその未開性を殊に強調するゆえ、文学史の開始には含めまいとする点、他書と異なる姿勢を示している。しかし古代であるとはいえ神話や祝詞といった神事に関するものについては一定の信頼を置いているようで、事実、本文次の引用箇所においては未開性の強調を伴いながらも、その文学としての価値はやはり認めていたとみえる。

(6) 日本における文字使用は、当時外交相手であった中国の中国語、当時は朝鮮大陸を経由した漢語であったその文字体系、

漢字の渡来を俟たねばならない。その文字使用の最古は五世紀前半、また文字による日本語の表記となるとさらに五世紀後半にまで下るとされる。なお日本製文字史料としてその年代が特定されるものは実に二世紀頃まで遡ることができるが、沖森卓也氏は「これらはまだ単なる目印としての記号か、言語記号としての漢字と見なされていたかどちらか分からない」としている(沖森卓也『歴史文化ライブラリー151 日本語の誕生…古代の文字と表記』吉川弘文館、二〇〇三年)。

(7) 音声言語そのものではないものの、芳賀書(十譚)が「歌の節調が舞踏と大関係のある事は疑もない事で、四三で句をなすのはつまり四足前へ出して、三步後へ引くとかいふ風の関係から起こつたものであります。上代の舞方も分らず、この辺の研究は中々むづかしいが、諸外国のと比較をして尚よく調べねばなりません」とし、舞踏という現場的要素を具体的に想定していることは、その少ない例として注目に値する。

(8) 折口信夫「東北文学と民俗学との交渉」日本放送協会東北支部『東北の土俗』三元社、一九三〇年、折口信夫『折口信夫全集19』中央公論社、一九九六年、所収。

(9) 金田一京助「巫女の神語から叙事文学の誕生へ」金田一京助全集編集委員会編『アイヌ文化・民俗学 金田一京助全集12』三省堂、一九三三年、所収。

(10) 文字で書かれたものをしか扱わないことには今日から見て様々の要因が考えられるが、最も単純には無いものを学問的に証明することの困難ゆえであろう。歴史学も、その研究根拠の大半を遺跡や史料といった形あるものに求める。文学史にとっての形あるもの、それが文字資料であったのである。

(11) 武田祐吉『上代日本文学史』博文館、一九三〇年。

(12) 武田祐吉「大和時代文学概説」『日本文学講座 第一巻』改造社、一九三三年、所収。

(13) 久松潜一『上代民族文学とその学史』大明堂書店、一九三四年。

(14) 久松自身も、古代「未開時代」文学についてある一作品の内部に理想の対象としての「口誦時代の文学」と、現実の対象としての「記録発生時代の文学」という時系列を踏まえた二区分を設け、使い分けている。

(15) 柳田国男「口承文藝大意」『岩波講座日本文学11』岩波書店、一九三二年。

なお当該論文は後に『口承文藝史考』(柳田国男『口承文藝史考』中央公論社、一九四七年)に収められた。『定本柳田国男集 第六卷』薩摩書房、一九六八年、所収。

(16) 柳田はこのように、自身の民俗学的手法を主張するのみならず、文学研究の側にも積極的に迫っていく。文明国家において

その国民性の基層として民族文化を求めるという姿勢を共にする以上、その対象として扱うものが雅の文学として既に見出されてきた文学作品の前身のみに留まっている状況を、放任してはおけなかったようである。

- (17) 具体的には民俗学者である折口信夫(折口信夫「口承文学と文書文学と」『日本精神文化』二巻 一号(一九三五・一)、折口信夫『折口信夫全集5』、中央公論社、一九九五年、所収)の当代著書に明らかである。要約すれば、文学研究にとって『コウシヨウ』文学は過去に在り、現存しないものであるから「誦・そらんずる」で事も足り、またそれは正に古代「未開時代」の語部による暗誦の様が連想できるものであるともいう。対して民俗学にとっては特定のものでこそないものの、それはいずれかの時点の過去から「承・うけつぐ」ことが為されて来たからこそ現在のであつたから、その用字である必要があつたというのである。但しこの用字検討が、本稿でしてきたような両学問分野の術語の逆位相として、時系列の位置の相違などに見られるそれを自覚した上で比較対照するものであつたかどうかは、今後なお検討を要する。

- (18) 高木市之助「日本文学研究法」『日本文学講座 第一巻』改造社、一九三三年、所収。